

えんまと希望の星

憂愁の過去と多望な未来

久世千歳

Chitose Kuze

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
力キネ



あとがき

9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

目次

220 207 189 162 138 123 101 62 27 11 7



えんまと希望の星

憂愁の過去と
多望な未来

0

四千三百五十二本目の岩檜いわぐりが男の胸を刺し貫いた。もう何年ここにいるのかも分からない。何度殺されたのかも分からない。ボロ雑巾ぞうきんのようになつたけれど、貫かれても貫かれてもすぐに再生し、また責め苦が再開される。その事実だけが揺るぎなくある。

男はもう、自分がどうしてここにいるのか覚えていなかった。それどころか、自分が閻魔大王えんまとして、地獄じごくの王として日々を過ごしていたことも分からなくなっていた。

ただの男が、岩に刺し貫かれて死んでいる。流れ出した血がぬらぬらと岩肌を赤く染め、撒き散らかされた内臓が、広漠たる大地の上でひからび

かけている。

その光景を見ている者は誰もいない。

世界には、岩と砂しかなかった。灼熱しやくねつを宿して燃える、太陽のようなものが照りつけていた。太陽という単語を男は知らなかったし、光という単語も知らなかったが、熱は確かに世界を煮え滾たぎらせている。

男以外の生き物はどこにもいない。大地には、虫の一匹も這はっていない。

男がいる場所は、無間地獄むげんと呼ばれる場所だった。地獄の最下層に広がる、広大な裁きの舞台だ。

ぼたりと、血のしたたる音だけが響く。

やがて、男の身体がびくりと痙攣けいれんした。

地面から屹立きつりつしていた岩の檜がかき消えた。男の瘦やせた身体が、ぼたりという音をたてて地面に落下する。二度跳ねて、ぐつたりと男が横たわる。

ごふりと口から血を吐いた。撒き散らかされた内臓は、あまりの高熱にからからに侵されて、乾

いて崩れ、まわりの砂と同化していた。

びくり、と男の指が震えた。男はのろのろと手を上げた。すがるように空に伸ばした。いつだったか、こうして、手を伸ばしたことがあったような気がした。よく覚えていない。誰かがいたような気がする。世界には最初から、自分一人しかなかったような気もする。

そんな思考もすぐに、熱にうかされたように消えた。再生する身体を抱えて苦しみもがくだけの、男は一つの肉塊にくかいになった。

自分は許されざる者である、と。その思考だけが、男の唯一の真実だった。

空から炎が下りてくる。マグマがぼこぼこと、泡を立てて煮えている。男はぼうつと、その様子を見つめている。

放射される熱が、男の鼻面を焼き潰すつぶ。頬を溶かし、骨が乾いてひび割れる。剥き出しになった顎あごと歯で叫ぶ。悲鳴。悲鳴。

マグマと大地の間で、男の身体が、炭になって燃え落ちる。

気がつくと男は、砂埃すなぼこが舞う雑踏の中にいた。

身体は痩せこけ、だぼついた着物の衿元えりもとから、痛々しいほど尖った鎖骨とがが覗のぞいている。伸びた黒髪はぼさぼさに乱れ、すだれのような前髪に視界を覆われながら、うつむきがちに家路をたどっていた。

男が生まれてから、十八年の歳月が経過していた。青年といってもよい年齢だ。青年には、名前がなかった。

「……………凶作、か」

呟つぶやいた。青年の家には金がなく、近くの農家をまわってクズ野菜をもらったり、わずかばかりの施しほしを得て暮らしていた。

けれど最近では、続く日照りによる凶作で、民の心はすさんでいる。自分たちの食べるものさえおぼつかないのに、施しなどくれるはずもない。仕方なく

青年は、建ち並ぶ店の裏に捨てられている、残飯やクズ野菜を集めることにしたのだ。

このままではいけないだろうとは分かっている。

こんな状態で、いつまでもやっていけるわけがない。青年は、父親と二人暮らしをしていた。父親は心を病んでいる。

どこからともなく、子どもの笑い声が聞こえてきた。痩せた子どもたちが、藁わらを持つてはしゃぎまわっている。こんな時代になっても、子どもは無邪気だ。ことの深刻さが分からないから、どんな時でも笑っていられる。

青年はしばらく立ち止まって、羨うらやましそうに、はしゃぎまわる子どもたちを見つめていた。再び歩き出す。

人々が、噂うわさ話に興じている声が聞こえてくる。

——地獄の蓋ふたが開いて……

「亡者が溢あふれだす」

その噂は知っていた。地獄で、亡者たちの裁きを

行っている閻魔大王が倒れた。現在の地獄は、裁き待つ亡者たちで溢れかえっている。

極楽ごくらくにも地獄にも行けないままその場にとどめられた、順番待ちの死者たちが溢れかえって、この世界に逆戻りしてきている。だから、雨は降らず、太陽は凶悪なまでに日々を照りつけ、生者たちを滅ぼそうとしているのだ。

異常な気候になにがしかの理由を見つけたという、人間の弱さの現れだろう。事態を打開する力のない民は、そうやって恐怖をごまかして、生きていくとしている。

青年は市井に蔓延まんえんする噂をそうとらえていた。噂は、噂にしか過ぎない。問題はほかにある。

こんな事態になってもまだ、官吏かんりたちは、ある者は出世争いに必死になり、ある者は権益を独占し、民を顧みず暴利を貪むさぼっているのだ。その方がほとんど問題だ。

——地獄から、次の閻魔大王を探すために、使者

がこの国に来てゐるらしいわよ。

聞こえてきた新たな噂に、青年は足を止めた。その噂は、今日始めて聞いた。

——馬鹿な。地獄の王が、人間から選ばれるわけがない。神さまみたいなものだろう。

——それが、前の閻魔様も元は人間だったって噂さ。

——次の閻魔が決まれば、この国もちよつとはマシになるって？

そうに違いない、と井戸端会議のかまびすしい声。馬鹿らしい、と青年は歩き出す。

地獄の閻魔だと。死後の世界だと。

そんなものにすがって何になる。

噂話の飛び交う中を、青年はとぼとぼと歩いた。

現実を直視するべきだ。

明日の食い扶持ぶちをどうするか。青年の前に立ちはだかつてゐる現実は、どこまでも無残なものだった。

1

えんまを助ける。

与えられた、樹胎管理室の部屋に置かれていた墨で、腕にデカデカと文字を書いた。えんま、と漢字で書くことは諦めた。えんまのまは分かる。魔法使いの魔だ。えん、という字が分からない。

「……呼ぶ分には関係なかったからなあ」

声に出して彼を呼ぶだけなら、漢字なんて関係ない。手紙をやり取りするような仲間でもなかった。

「まあ、分かればいいんだよ、分かれば」

うんうんと頷いて、公弘は拳を固めた。

閻魔を、助けるのだ。

そのためにはまず、彼がいるという、無間地獄に行かなければならない。無間地獄に行くためには、

聞いたけど忘れてしまうくらい想像もつかないような長い年月をかけて、地獄の底まで落ちていかなければならないらしい。

地獄の底に近づくほど、時間の流れは早くなる。

地獄では何千年もの時が流れていても、地上ではただの一時間ほどということもあり得る。

そういう話を聞いていたので、想像もつかないような旅になるだろうという覚悟はしていた。だが、長い時間をかけて無間地獄に行く間に、当初の目的を忘れてしまわないかということが不安だった。

なんせ公弘は、頭があまりよくないのだ。

バイトの手順も覚えるのに人より苦労したし、それが原因で、あの稲毛に目をつけられてしまったという面もある。えんま、という漢字もろくに書けない。

さすがに、閻魔を助けに行くという重大な決意を忘れる自分ではないと思いたいのだが、なにせ流れるという時間が、あまりにも長大だ。

「そろそろ、準備は整いました?」

公弘の目の前に、ふわりと耶蓮流^{ヤイオル}が現れた。不思議な形に結った髪の毛に、ゆったりとした胴着のよ
うな中華風の服。

日本で見た時はまわりから浮いていた彼女も、当然というべきか、地獄の景色には馴染^{なじ}んでいる。

「うん、いつでも行けるよ」

まだ腕まくりしたままの状態で、公弘は大きく頷いてみせる。

耶蓮流が不思議そうに、剥き出しの公弘の腕に視線を送った。

「……………暑いのですか?」

「あ、いや。これは、気温とは関係なくて」

確かに、地獄の気温は日本に比べて高い。空気は変な臭いがするし、湿度が高いし、日本の梅雨^{つゆ}の六倍は不快指数が高いと思う。でも、これはそういうのとは違うんだ……という理由を、ぺらぺらと耶蓮流に説明した。いつもより口数が多くなっている自

分に気づく。日本の梅雨の話なんて今はどうでもいい。緊張している。

「というわけで、長い旅になるんだろ? 忘れないように、腕に書いてみたんだ」

そこまで説明して、ほら、と耶蓮流に腕を差し出した。もうちょっと筋肉が欲しいなと思っているひ
よろつとした腕に、デカデカとした墨字。

えんまを助ける。

俺は生きてるって教える。

むげん地獄から連れて帰る。

馬鹿みたいに単純な文章を三つ並べた。えんまは漢字で書けなかったが、地獄は書けた。これさえ見れば、時間がたつても自分の目的を思い出す、はず。耶蓮流は、微妙な表情で公弘の腕を見つめている。自分の案がグッドアイディアだと思っている公弘は、耶蓮流の反応に気づかず先を続けた。

「あ、でも墨って水性なのかな。油性じゃないよな。よれたりにじんだりするかな……汗とかどうなんだろう。消えたら意味ないしなあ……。なあ、どう思う、耶蓮流さん」

「ええと、ですね」

耶蓮流は、頬に手をあてて困ったように首を傾げた。

その反応を見てようやく、何かずれたことをしているらしいと公弘は気づいた。

「……何をやっているんだい、君は」

困惑に満ちた空気に、新しい声が割り込んだ。

「二千年の時を舐めすぎだよ。記憶を失い自我も消え、おそらく使っていた文字すら忘れている。そんなものは、腕に書かれた妙な紋様に成り下がるはずさ」

割り込んできたのは、地獄の鬼、秦花邇だ。

この樹胎庭園の室長らしいが、長く伸ばした髪の毛といい、露出の多い衣服といい、いまいち室長と

いう言葉が似合わない。

公弘の目に、彼女は随分と若く見える。美人だとは思うのだが、かけている眼鏡のせいかな、学校の女教師といった印象だ。

秦花邇はつかつかと公弘に歩み寄ると、公弘の腕の文字をじつと見つめた。

「……あはは、下手な文字だね」

「筆、あんま使ったことなくて、うまく書けなかったんです」

「ああ、そうか。現世では色々な文房具が発達しているらしいものね。興味深い」

秦花邇が、公弘の腕に手を伸ばした。細い指先が触れる。鬼の爪がかすかに肌をかすって、公弘はびくつと腕を引いた。

「ああ、ごめん。傷つけたりしないよ。ただまあ役に立たないついでに、墨は耐久性が低いってことを教えてあげようと思ってね」

公弘の腕を撫でた指を、秦花邇はぴっと立てる。

指の腹に、べつとりと墨がついている。

「なんせ乾くまでに時間がかかるしね。こすつたらすぐにこのザマだから」

「あー……そんな気は、してたんすけど……。つまり残らないし、役に立たない、ですか」

しよほくれた声で言つた公弘の言葉に、秦花邇はうん、と頷いた。公弘はがっくりと肩を落とす。

「じゃあ、俺、どうしたらいいんすかね」

公弘の様子がよほど面白かつたのだろう。秦花邇が声を上げて、ほがらかに笑つた。

「君、要領が悪いタイプだろう。そんなんじゃあ、働き出した時に苦労するよ」

うぐ、と公弘は言葉に詰まる。

コンビニのアルバイトですら稲毛に目をつけられて苦労したというのに。今、この状況で、そんな予言は聞きたくない。

「仕方ないな。正解を教えてあげよう」

恩着せがましく、秦花邇は教えてくれた。

「そもそも、無間に行く手段は一つだけなのか？

無間地獄に行くために、誰もが二千年の時を落下しなければならぬのだとしたら、罪人以外の誰も無間になんてたどり着けないことになるよ。仮にも地獄を管理監督するという職務を与えられた獄卒たちが、たかが小地獄の一つにたどり着けないというのは問題だと思わないかい？ 通用口があるはずなんだよ。無間に用のある者もいないから、忘れられているとは思うがね」

「いや、でも、それって」

疑惑に満ちた目で、公弘は秦花邇を見上げた。

あるはずだとか、忘れられていると思うだとか。

この秦花邇という鬼も、憶測で喋おぼろっているだけのような気がする。彼女も、通用口とやらがどこにあるのか知らないのでは……？

公弘の視線に気づいたらしい。秦花邇が堂々と胸を張って言つた。

「私は比較的なんでも知っているが……知らないこ

ともある」

「威張ることじゃないでしょう」

新たな声が割り込んだ。

「偉そうに解説してるのが聞こえましたけど、結局それってただの推測ですよ。よくないと思いますよ、こういう大事な局面でいい加減なことを言うのは」

塊柳カンヤシと呼ばれていた鬼だった。腕組みをして秦花邇ニラを睨にらんでいる。丸顔の、大人しそうな顔をした若い鬼なのだが、結構、辛辣しんらつなことも言うらしい。

「僕にうだうだ語るだけならいいですけどね。いい加減なこと言つて、後から問題が起こったら困るんですよ」

「相変わらず手厳しいなあ、君は」

秦花邇は、塊柳を振り向いて苦笑いだ。けれど、不愉快ふげきそうではない。普段の二人の関係性が、窺うかがい知れるようだった。

しかし公弘には、二人の会話になこんでいる余裕

はなかった。一刻も早く地上に戻らないと、いつまでも美奈子みなこにバイトのかわりを頼んでいるわけにもいかない。それに、残してきた樹いつきと猛たけしの様子も気になるのだ。

地獄と現世での時間の流れ方は違うのだと言われ、でも、いまいち信用できなかった。こうやって呑気のんきに話している間に、地上では何百年も時間が過ぎていて、浦島太郎のようになってしまったらどうしようという不安もある。

それに何より、閻魔えんまが地獄で苦しんでいると想像すると、いてもたってもいられなかった。

「で、結局……」

通用門はあるんですかいいんですか。

そう聞こうとした時、部屋の扉が開いた。視線を向けると、包公ホウコウと名乗った壮年の男が立っている。

公弘がはじめて顔を合わせた時には白と黒の着物を着ていたが、今は黒い烏帽子えぼしのようなものをかぶっていて（烏帽子なんて中学の社会科の資料集でし

か見たことがないのでよく分からないのだが）、黄色地に、様々な刺繡しゅうが施された、着物のような服を身につけていた。

「準備は、もう終わったかね」

包公は、穏やかな口調で話しかけてきた。不思議と深みのある、優しく響く声だった。

「あ、はい」

包公が放つ威厳に気圧けおされながらも、公弘は頷いた。それから一度顎を引いて、意を決して、包公に話しかける。

「あ、あの。秦花邇さんが、無間地獄に続く通用門みたいなものがあるかもしれないって言うんですけど、俺、そういうの使えるんでしょうか。それとも閻魔がそうしたみたいに、やっぱり二千年？　くらい、無間地獄に落ち続けないといけないんですかね」

包公は驚いたように目を丸くして、それから笑った。

「はっは、面白いことを考える。人の身に、二千年

の時間が耐えられると思っているか。私ですら正氣をなくすよ。彼を助け出すどころでは、あるまい」

「では、やはりあるんですね」

秦花邇が身を乗り出した。

「ああ、ある。あるはずだ。少なくとも私の知識の中には、入っているようだ」

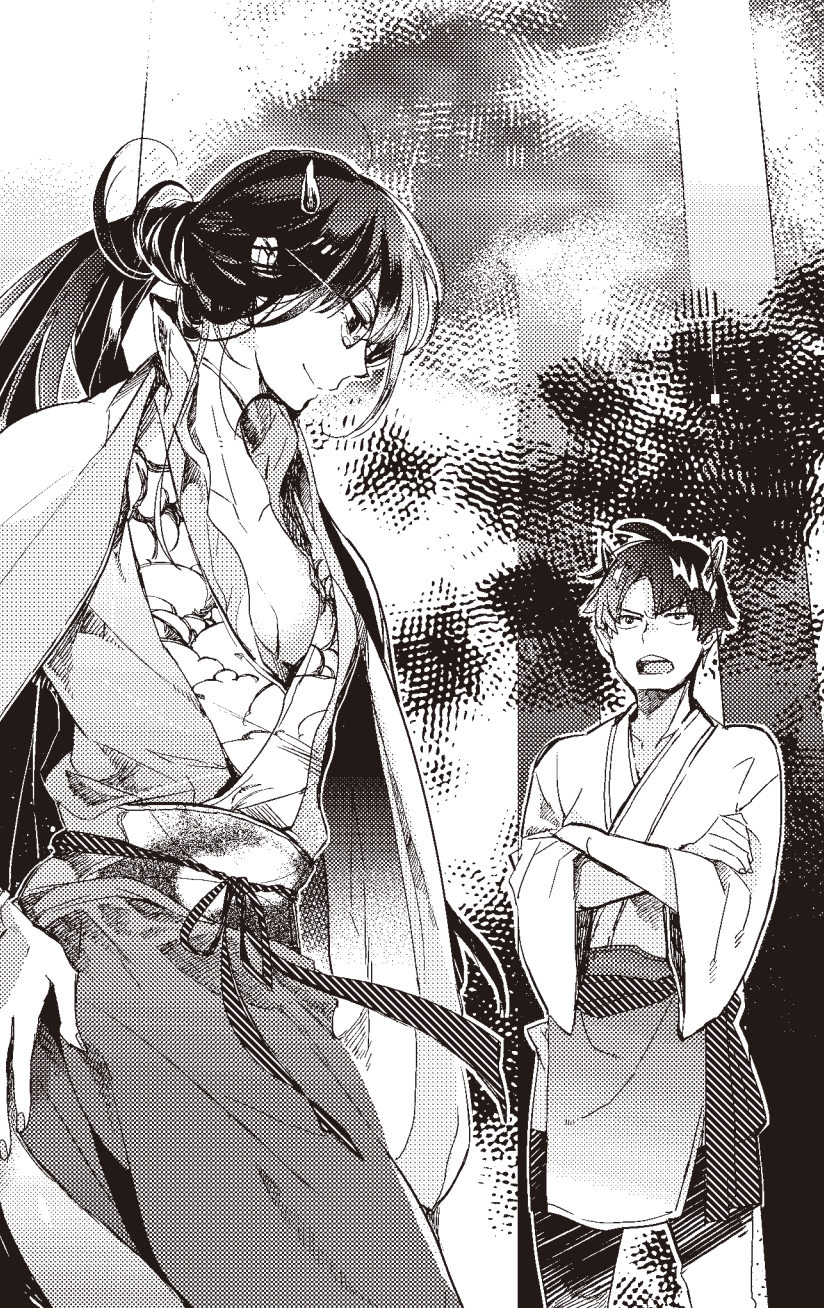
「ようだ、とは？」

「ふむ……うまく伝えにくいのだが、私にはこの地獄という国のことが分かる。ここに生まれた瞬間から、案内されずとも分かる。そういうふうになっているらしい」

役割を果たすために、必要なことなのであろうな、と包公は物々しく告げた。

「へえ、なるほど……。実に興味深いですね。まるで、誰かが貴方あなたに、その知識を与えたかのようだ」
「そうかもしれないぬな。そもそも私は、招聘しょうへいされてここに来ているのだから」

「そこを、もう少し詳しく……った」



包公の方に身を乗り出して話をねだっていた秦花邇は、そこで唐突に言葉を止めた。塊柳という鬼が、持っていた決裁板で、秦花邇の頭をはたいたのだ。

「今日の君は、一段と厳しいね。いつもはそんな、実力行使に出るまではしないのに」

恨みがましい口調で秦花邇が言うと、塊柳が冷静な声音で、

「早くその人間に出発してもらわないと、仕事が進まないじゃないですか」

そう、すげなく言い返す。

そこの人間呼ばわりされた上に邪魔者扱いされた公弘はさすがにむっとした。この塊柳という鬼……実は一番、公弘に対して冷たいんじゃないだろうか。「まずは事態を進めることが先決なんですよ。仕事に再開したら、もう貴方はいてもいなくても一緒みたいなもんですから。好きに出て行つて話でもなんでも聞いたらいいですよ」

「君、今日は本当に口さがないね……?」

「焦^{あせ}ってるんですよ！ 仕事がストップして丸一日たつんです。整理しないといけない書類がどれだけたまっていることか……!」

頭をかきむしりそうなほど、切迫した声音で嘆いている塊柳を見て公弘は気づく。

公弘は、樹胎管理室の部屋を借りて出立の準備をしている。塊柳が一体どんな仕事をしているのかは知らないが、公弘を筆頭に、耶蓮流だの包公だの、無関係な者たちが職場をうろつきまわっていたら、それはまあ、確かに、邪魔だろう。

お前らが撒いた種だろうという気持ちと、申し訳ないという気持ちの混じりがあった。

閻魔を殺した琉^{ニルマ}摩という鬼は、あれから一切、姿を見せない。

「してもしなくてもどちらでもいい仕事を、まったく君は、えんえんと真^ま面^め目にやるものだね」

小馬鹿にした内容とは裏腹の優しい声で、秦花邇が言った。

「ええ。仕事とはそういうものだと思っています。

閻魔大王様と違って、僕には地獄の全貌ぜんぼうは見えませんの。自分の仕事が何かの役に立っているのだと信じて、日々を堅実に働くことにしているんですよ」

「立派なものだ」

さて、と。

話を切り上げた秦花邇が、公弘の方に向き直った。

「君は、行くのかな？」

「え、あ。行きますけど」

いきなり話を振られて、公弘はしどろもどろに返事をする。

「そうか。ならば見送ろう。包公様は、彼を案内するため、こちらにおいでになったのでしょうか？」

問いかけられた包公は、軽く頷いた。

「ああ。私にできることは、このくらいしかないがね」

「ありがとうございます」

公弘は、包公に向かって頭を下げる。

視線が下がると、腕に書いた文字が見えた。秦花邇にこすられてにじんでしまったが、まだちゃんと読める。

えんまを助ける。

じつと腕を見つめている公弘の視線に気づいたのだろう。包公が近寄ってきて、公弘の腕を覗き込んだ。

「ほう。えんまを助ける、か」

冷静に読み上げられて、恥ずかしくなる。公弘は包公の視線から隠れる位置に、腕を動かした。言い訳のように言う。

「いや、俺、てつきり自分もえんえん地獄まで落ちないといけないのかなって思ってた。その間に閻魔のこと忘れないか不安で……。まあ、なんか、決意表明にはなるかなっていうか……。いや、墨つてすぐ消えるみたいだし、あんまり役に立たないのは分かってるんですけど」

どんどん尻すばみになる言葉。

言っているうちに恥ずかしさが増してきて、顔を隠してその場にうずくまりたい気持ちに駆られる。

「む、無駄、ですよね」

包公の反応を待つことに耐えきれずに、ついに自分から言った。秦花邇には馬鹿にされたし耶蓮流にも困惑された。公弘の心はだいぶ、折れている。

「いや……無駄とも言い切れまい」

しかし包公の反応は、公弘の予想とは違ったものだった。

「無間地獄に異変があるようだね。私の知っている形と変わってきている。自分の国のことだから分かるのだよ。何故だか彼にはまだ、地獄の王としての力が残っているようだ。王の権限だけが、この地獄という国を変え得る」

「……どういふことですか」

「詳しいことは、行ってみなければ分からないがね」

公弘の疑問に、包公は答えてくれなかった。

「つまり……無間に行っても、本来の十六小地獄としての形があるのではない、と？」

好奇心に充ち満ちた様子で、秦花邇が口を挟んだ。おそらく、と包公が重々しく肯定する。

無間地獄は本来、中でさらに十六の小地獄に分かれており、罪人が生前に犯した罪に応じて受ける罰が決まっているのだという。

「自身を無間に送ることによって、皮肉にも彼は、無間地獄を自分の国とした。私がこれからこの地獄を作り替えるのと同じように、彼は、無間地獄を作り替えているのだと思う」

包公はそこで言葉を切って、公弘の手をとった。肉厚の、荒れた手のひらだった。体温があつて熱いのだという当たり前のことに、公弘は驚いた。

「私もこれ以上の助言はできない。ただ、何が起るか分からない無間地獄で自分を保つために、その文字はきつと役に立つ。飲まれないように気をつけ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。